



〈2015 H27090015 (国語)〉

注意事項

1. 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
2. 問題は2～11ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
3. 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
4. マーク解答用紙記入上の注意
 - (1) 印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。
 - (2) マーク欄にははつきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残さないようによく消すこと。

マークする時	● 良い	○ 悪い
マークを消す時	○ 良い	● 悪い

5. 記述解答用紙記入上の注意

- (1) 記述解答用紙の所定欄(2カ所)に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。
- (2) 所定欄以外に受験番号・氏名を書いてはならない。
- (3) 受験番号の記入にあたっては、次の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。

数字見本	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

- (4) 受験番号は右詰めで記入し、余白が生じる場合でも受験番号の前に「0」を記入しないこと。

(例)

3	8	2	5	番
↓				
万	千	百	十	一
	3	8	2	5

6. 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
7. 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。
8. いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
9. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

日本は一九世紀半ばの開国以来、発展した西洋の文物を積極的に取り入れ、国の政治体制の転換とともに、「文明開化」と呼ばれる生活様式の大変革を経験した。「文明開化」の主導的人物のひとりであった福澤諭吉が、『西洋事情』のなかで、人間は本来「野鄙固陋」の風習を脱して礼義文明の世を志向するものだとし、そこには日本の物質的な発展への願いのみならず、人民が「各々その徳行を修め法令を守」るような国のあり方への理想が込められていた。つづけて、「文明の世に行わるゝ事物、一として天然に出でざるものなし」と述べられていることから、福澤の言う「文明」は、自然と人間との交渉において生まれる「文化」の意味も包含していたことがわかる。さて、その当時世界の覇権を握っていた西洋列強は、「野鄙固陋の風習」にとらわれていると思つた地域を植民地支配し、そこを「文明」化することを支配の正当化の根拠としながら、みずからの帝国を発展、拡張させていた。大日本帝国が第一に目指したのも、富国強兵により、そうした帝国の仲間入りを果たすことだった。「文明」は帝国主義と近代化のキーワードだったのだ。

日露戦争に勝利し、朝鮮半島を植民地化するに至つて名実ともに西洋の列強と肩を並べる帝国となつた日本では、「文明」から「文化」へのシフトが起きていた。哲学者三木清は一九四一年におこなつた講演のなかで、この間の事情を実に的確に要約している。それによると、「文化」といふ言葉は……大正時代になつてはじめて出て来た言葉であり、「文明」は物質文明、文化は精神文化であるといふ意味に於て、いつも文化は何か文明よりも高いものであるといふ考へ」が支配的になつた。そこにはドイツ語の「クルトゥール」といふ言葉の歴史的な意味」に似たものを読みとることができる。それは「先進国に対して後進国が如何にして自分の位置を主張するかといふ場合に、自分の文化を特にクルトゥールと称」することで「国民的或は民族的」なアイデンティティを確立することだった。

「文明」批判としての「文化」の関係を整理しておこう。「文化」は、「文明」批判の言葉として、「ふつうのもの」を指し示すのでなければならぬ。文明が全体的な状況であるなら、それに対抗する文化もまた全体的なものでなければならず、「特別」だつたり部分的であつたりしてはならない。しかし、歴史的には、文化は「特別」なものになつてしまふことが多かった。「文化」を高踏的な芸術作品などに限定する場合もそうだが、さらに極端で危険な例としては、自分たちの「文化」の優位を誇り、アーリア人としてのアイデンティティの純粋性を強調したナチス・ドイツが、その「文化」にとつての他者であるユダヤ人の排斥に向かつた例などを考えてみればよい。では文化を、このように限定された意味においてではなく、「ふつうのもの」、したがって全体的かつ「総体的」的なものとして取り戻すにはどうすればよいだろうか。

文化を「ふつうのもの」、そして「総体的」なものとして取り戻すためには、「文化」それ自身が抱える二面性や矛盾を解決するような立場をとるのではなく、その矛盾を矛盾として受けとめることが必要である。では、この二面性や矛盾とは何だろうか。たとえば先ほど述べたような、アーリア人としてのアイデンティティの純粋性を強調するための「文化」について考えてみよう。それが縁遠く感じられるなら、日本人に「アイデンティティ」を与えるものと想定される「日本文化」というものを考えてみよう。

このような用法では、「文化」はある集団（アーリア人、日本人）の活動の「総体」を表すものと考えられている。しかし、「文化」がある集団の活動の「総体」だと言うとき、どのようにして集団はそれを把握できるのだろうか。全体を全体として把握することは、その外側に立たなければ不可能である。²これは大きな矛盾をはらんでいる。ここに言う「文化」は、私たちのアイデンティティを保証してくれるもの、つまり、私たちを包み込んで、ある場所に「根づいている、あるいはそこを故郷であると感じてくつろぐことができる」という感覚を与えてくれるはずのものである。しかし、そのように「文化」を把握し、理解しようとするとき、私たちはその外に出なければならぬ。「文化」によつてアイデンティティを得るために、文化の内側にいると同時に文化の外側に出なければならぬのだ。これはどうにも解決しようのない矛盾と思われる。

しかし実のところ、この矛盾それ自身が「ふつうのもの」なのである。³つまり、文化の内側と外側に同時にいなければならないというのは、私たちの生の前提条件と言つてよい。私たちは「文化」に限らず、「内側と外側に同時に」存在するということを常日頃実践しているのだ。「私」という存在でありつつ、その「私」が外から見てどんな人間なのかを考えつづけているし、「人間」という生物でありつつ、その「人間」という生物の生態や行動などを、あたかもほかの動物を観察するように見て、知るわけである。

⁴ここまで述べた「矛盾」は、「疎外（外化）」と言い換えることもできる。言い換えてみれば、それがいかに一般的であるかがわかるかもしれない。疎外（外化）を人間と自然との交渉という点からもつともあざやかに論じたのが、『経済学・哲学草稿』のマルクスである。そのなかでマルクスは労働についての考察を展開し、人間が「対象へと向かう生産活動」において「そこに示される対象の、つまり生産物の、疎外と喪失」を経験するのは、人間が「自然なくしては、感覚的な外界なくしては、なにももの作り出すことができない」からであり、自己実現としての創造物はその人間の外側に存在せざるをえない、と論じている。これは労働をめぐる考察であるにとどまらず、まさに「文化」についての認識論的かつ存在論的な議論になつていと言え、翻つて、「文化」が「人間の精神的な生活にかかわるもの」だけに限定されるわけではなく、労働をはじめ、人間が自然との交渉を通しておこなうあらゆる活動を内包していることを示している。

マルクスの言うように、「自己疎外の克服は自己疎外の歩みと同じ過程をたどる」ほかはない。「自己疎外」とは、これまでの議論の言い方を使えば、自分を「内側と外側に同時に」いるような視点から捉えることである。それは、捉える自己と対象化された自己とのあいだに距離をもたらす。私たちはこの距離にある種の居心地の悪さを覚え、できればこの距離をなくしてしまいたいと思う。アイデンティティ（自己同一性）とは、捉える自己と対象化された自己とが一致する状態であるが、この距離をなくしてしまつては、自分を外から眺めてその全体を把握することができなくなるので、そもそもアイデンティティは不可能だということになる。⁶「自己疎外の克服」は「自己疎外」によつてしかなされない、というマルクスの言葉——それが意味するのは、「文化」が本来抱える二面性や矛盾、アイデンティティの不可能性を解消してしまうのではなく、こうした二面性や矛盾を近代の条件として引き受けてこそ、「文化」の意味をそれにまとりつく限定的なものから「ふつうのもの」へと開いてゆける、ということだ。繰り返しになるが、たとえばそのような矛盾やアイデンティティの不可能性を解消しようとしてナチスが利用したのが、アーリア人の「文化」であった。

国民的なアイデンティティを強調するのに利用されただけでなく、「文化」の意味は、人間の精神的活動とその具体化としての芸術などに限定さ

れるようにもなったが、これも近代の特徴である。すなわち、物質的な発展とそれがもたらした矛盾から目をそむけ、美学的な解決に訴えて、ますます疎外を強化してしまうという近代が抱えた問題でもあったのだ。その結果、自然との交渉を通じて創造をおこなうという基本的な意味から「文化」がかけ離れてしまい、人間の日々の営みが歴史を創るという事実にはリアリティを感じられなくなつて、さまざまな問題を抱えた現実に対するベシミズムが広まっていく。しかし、批評家テリー・イーグルトンも指摘しているように、「文化」に内在する二面性やアイデンティティの不可能性のゆえにこそ、人間は歴史を創ってゆくことができる。距離をとって周囲に関わるということができず、環境に依存し左右されるほかないのが動物なら、人間はそれとは異なる。人間が環境を把握するとき否応なく生じる距離Ⅱアイデンティティの不可能性こそが、みずからまわりにはたらかせて創造するのを可能にしているのだ（「文化とは何か」）。

人間が歴史を創る——それは、社会に生じるさまざまな問題に、そこから距離をおきつつ客観的な視点をとるという疎外（外化）のプロセスを通して私たちが対峙し、環境に積極的に関わりあいながら生を営んでゆくことである。そして「文化」は、こうした日々の営みそのものを表す言葉なのだ。

（大貫隆史・河野真太郎・川端康雄編『文化と社会を読む 批評キーワード辞典』による）

注① 野鄙固陋：下品で古くさいこと。

問一 傍線部1「文明」は帝国主義と近代化のキーワードだった」とあるが、この時の「文明」はどのような概念を含み持っていたか。最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- ア 矛盾としての文化。
- イ 日々の営みとしての文化。
- ウ 「特別」なものとしての文化。
- エ 「総体的」なものとしての文化。
- オ 「ふつうのもの」としての文化。

問二 傍線部2「これは大きな矛盾をはらんでいる」とあるが、どういう「矛盾」か。これを説明した次の文の空欄に当てはまる言葉（漢字二字）を本文中から抜き出し、記述解答用紙の所定の欄に記せ。

ある文化がその集団の全体的な活動であるかないかについて、その文化に属さない でなければ決められないという矛盾。

問三 傍線部3「文化の内側と外側に同時にいなければならないというのは、私たちの生の前提条件と言つてよい」とあるが、このような「前提条件」を可能にするものはなにか。この傍線部3を含む段落をよく読んで、これを説明した次の文の空欄に当てはまる言葉として最も適切なものを、後の選択肢ア～オの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

私たちが文化の内側と外側に同時にいられるのは、私たちに という精神作用があるからである。

- ア 隔絶感
- イ 現実認識
- ウ 自意識
- エ 自己充足
- オ 一般化

問四 傍線部4「ここまで述べた「矛盾」は、「疎外（外化）」と言い換えることもできる」とあるが、なぜこのように言い換えたのか。その理由として最も適切なものを次のア～オの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- ア こうした「矛盾」が、人間と自然との交渉を生み出していることを示すため。
- イ こうした「矛盾」は、人間の労働が生み出したものでしかないことを示すため。
- ウ こうした「矛盾」によって、私たちの生産活動が自然を支配することを示すため。
- エ こうした「矛盾」も、文化についての認識を深める手がかりになることを示すため。
- オ こうした「矛盾」は、私たちの日常的な物作りに端的に現れていることを示すため。

問五 傍線部5「自己実現としての創造物はその人間の外側に存在せざるをえない」とあるが、これはどういうことを説明しようとした例示か。その説明として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- ア 私たちは文化の内側と外側に同時にいることなどできないように思われるが、私たちが自己実現として作った物は、自然を社会の中に取り込んで文化の中心に組み込む活動だということを示すための例示。
- イ 私たちは文化の内側と外側に同時にいることなどできないように思われるが、私たちの分身とも言える創造物が私たちの外部にあることは、私たちの内部が外部にあるのと同じことだということを示すための例示。
- ウ 私たちは文化の内側と外側に同時にいることなどできないように思われるが、人間と自然との交渉によって作られた創造物は特別な文化を形成するものではなく、ふつうの自己実現の産物であることを示すための例示。
- エ 私たちは文化の内側と外側に同時にいることなどできないように思われるが、私たちの自己実現としての創造活動は自然という外部を私たちの内部に取り込むことなので、私たちが内部にも外部にもいられることを示すための例示。
- オ 私たちは文化の内側と外側に同時にいることなどできないように思われるが、生産活動が外部的と言えるような文化を生み出すものであったとしても、それは人間の内部にある精神活動に限定されるものではないことを示すための例示。

問六 傍線部6「自己疎外の克服」は「自己疎外」によってしかなされない」とあるが、なぜか。その理由として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- ア 自己疎外の克服は、自分の外側にある文化のなかに自分の位置をしっかりと占めることによってしかなしえないから。
- イ 自己疎外とは自己が外部化されることを言うが、外部化された自己がもう一人の自己を作り出すことでしかアイデンティティは保たれないから。
- ウ 自己疎外は自然という人間にとって外側にあるものとの交渉によって引き起こされるが、労働はそのような自然を文化の内部に取り込む活動だから。
- エ アイデンティティとは自分を見る自分とその自分に見られる自分との相互関係によって成り立つものだが、自己疎外は自分を見る自分を作り出すから。
- オ 自己が生産活動によって疎外された結果として自己実現としての創造物が生まれたように、生産活動による自己疎外こそが自己疎外を克服できるから。

問七 傍線部7「人間が環境を把握するとき否応なく生じる距離」アイデンティティの不可能性こそが、みずからまわりにはたきかけて創造するのを可能にしているのだ」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- ア 環境とかかわるときには、人間は文化の内側にいる自己と文化の外側にある環境の側にいる自己とに分裂してしまうが、その分裂を引き受けることこそが創造する営みにつながっていくこと。
- イ 環境をそのまま受け入れないことによって人間は環境の外側に位置を占めるが、環境の外側の居心地の悪さが、むしろ環境に積極的に働きかける原動力となり、環境をみずから変えようと試みること。
- ウ 人間が環境に働きかけようとするときには自己のアイデンティティさえ失いかけるが、環境への働きかけが自己を客観的に見る視点を作り出して、アイデンティティを取り戻すきっかけになること。
- エ 環境としての自己を理解しようとするときには、理解する自己と理解される自己とに自己が分裂してしまうが、そのような自己疎外はごくふつうの創造活動によって文化を成り立たせる前提となること。
- オ 環境を前にした人間は環境の外部にそれを認識するもう一人の自己を設定するが、それではアイデンティティの分裂を招いてしまうので、そのような自己ともう一人の自己を一致させるために創造活動を行うこと。

問八 本文全体の趣旨に合致するものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

ア 私たちのアイデンティティは、自分を見る自分とそういう自分に見られる自分との往復運動によって安定が保たれる。そういう往復運動は私たちを外部の人間がどう見ているかについて考えさせるが、それは自己疎外の一つの形態でもあるので、アイデンティティの確立は不可能に陥ってしまう。

イ 文化は歴史的に形成されてきたものだが、文化的なアイデンティティを得ることは不可能に近い。そこで、文化を高尚で美的な精神活動だけに限定せず、人間が環境を利用するような日常的な活動にまで拡げること、環境と文化が一体化して自己疎外をも克服した新しい歴史を生み出すことができる。

ウ 文化は富国強兵に傾きがちな文明を批判する働きを持つが、近代日本では文化を狭く定義してしまったために、文化を「ふつうのもの」とすることができなかった。これは文明から枝分かれた文化が文明を批判する矛盾から生じるもので、それを解消するためには文明から疎外された文化を総体的に捉え直す必要がある。

エ 文明開化によって得られた近代日本の文明はしだいに文化という意味をも持つようになって、近代日本の民族的なアイデンティティの形成に役立った。ところが、近代日本は文化を「ふつうのもの」として取り戻すことに失敗したので、日本文化は矛盾を含んだ困難な課題を背負い込んでしまい、日々の営みとしての文化を獲得できなかった。

オ 私たちは文化を特別なものとして扱いがちだが、そうすると文化は外部と内部とを区別して排他的な働きをしてしまう。私たちが自分の外部に出ることはむずかしいかもしれないが、たとえば私たちの日常的な生産活動こそは自己実現のような形で生産物を自分の外部に作り出す働きであって、歴史はそのようなふつうの営みによって作られるものだ。

(二) 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「故郷を失った文学」(「文藝春秋」一九三三年五月)で小林秀雄(一九〇二―八三)は、京都からの帰途、同じ列車に乗った瀧井孝作が車窓から見た山際の小径にひどく感動したのをきっかけに故郷について思いを巡らし、

あゝいふ山道を見ると子供の頃の思ひ出が油然と湧いて来て胸一杯になる、云々と語るのを聞き乍ら、自分には田舎がわからぬと強く感じた。
(略) ¹ そもそも故郷といふ意味がわからぬと深く感じたのだ

と書く。車窓の風景は、小林が一九三〇年代という時代の中で、故郷喪失についての思いを紡ぎ出す契機となった。この時、車窓の風景は個別の土地の風物という具体的次元に存するものではなく、「故郷」や「抽象的観念」について考える契機としての抽象的存在となり果てている。それも車窓風景に対する有力な態度の一つであろう。なぜなら、鉄道は具体的な土地をただの森や山、海といった ² 一般性の側に押しやりながら突っ走るものだからである。

小林とは対極的に「ふるさと」にこだわり続けた詩人室生犀星(一八八九―一九六二)の「汽車」(「いにしへ」一條書房、一九四三年)は、

ふるさとの端れに汽車の入りて
粗末なる家々灰いろに見ゆ
枯れし田圃に子供らも見ゆ
窓のべに顔さし出してゐしほどに
汽車は停車場に入れり
そこにならべる顔ども
みな我顔に似て頬とがり
眼はあらぬ悲しみをあらはせり
早春 ふるさに我は降り立つ

「ふるさと」への愛憎、ひいては自身への愛着と嫌悪とがない交ぜになった詩篇である。停車場で見かけた人々の顔を「顔ども」と呼ぶ姿勢は、枯れた田圃や粗末な家々を見るために車窓から突き出していた **A** に対する倦怠の情と裏腹であろう。故郷はそこを「離れる」ことによってこそ成り立つものだが、鉄道はその「故郷」を醸成する開かれた装置の謂いでもあった。そして「故郷」に戻る列車は、もはや自分のものであって自分のものでなくなった故郷と自分との距離を、あらためて指し示すのである。それは自己への愛と自己への疎隔感の関係と相似の形を描く。

戦後、阿川弘之(一九二〇―)は「年年歳歳」(「世界」一九四六年九月)で、上海から戻ってフクイン列車で郷里広島へ帰る元海軍大尉の「道雄」が、途中駅で卵売りなど駅内での物売りの姿を目にする様を描いている。道雄は、午前三時過ぎに通った山口県の小さな駅では駅員が貨物から味噌を盗んでいる場面を目撃する。さらにヒロシマに近づいて、車窓に広がる被爆地を眼にするようになる。この時、列車の窓は映画のスクリーンのように敗戦日本の実状を元エリート軍人の前に次々と見せつける装置である。戦災から遡れば、阿川が師と仰ぐ **B** には関東大震災後、当時住んでいた京都から東京へ向かう汽車旅を綴った「日記」と銘打たれた随筆「震災見舞」(「新潮」一九二四年三月)がある。そこには中央線経由で東上する途次の駅毎の混乱の様がごく手短かに書き留められている。だが、阿川のように人々ひとりひとりのキヨソまで目を向けているとは言い難く、そっけない記述に終始している。何があるか、何が見えるかは視覚の問題であるが、同時に知覚、認識の問題であることがあらためて印象づけられる。描く者自身もまた自らの行文によって描き出されるのである。

ところで、長く埼玉県に住まいした詩人大木実(一九一三―九六)の「通過」(未刊詩集「夕べのからす」)、「大木実全詩集」潮流社、一九八四年)。

列車は停まる／六番線上りホーム／高崎発上野行／多くのひとが降り多くのひとが乗る／――僕には通過駅大宮／(略)／この町で僕は二十七年働いた／愉快なおもいでが浮かばないのは／僕の気持が 生活が／愉快でなかったということか／(略)／この駅に この町に／残してきた二十七年の歲月／味気なかった 僕の長い中年期――発車のベルが鳴る 僕を載せ

窓の向こうに見える大宮が今の「自分」には無縁の、通過点に過ぎないという発見。ここでの詩人の眼は単に眼前の風景を見ているのではなく、三十年近い時間が積み重なった層を見ていると言った方がよい。今はもう日々の生活の場でさなくなった過去の町の駅に列車が停車し、わずかの間だけその町を見る。愉快な思い出が浮かんでこないことに気づき、その町での二十七年間に及ぶ日々の意味を問い直す。それは短い停車時間の中に、濃縮された過去を思い見る事に他ならない。この時、電車の窓は今の大宮を見る枠であると同時に、自分の半生を遠ざけ、その意味を映し出すスクリーンにもなっている。

ところで、流れ去る風景として眺めるのが乗客一般の視線だろうが、二人の優れた観察者の目には車窓からの風景も重要な情報源として飛び込んできく。

車窓見る処苗代稲漸く伸び直播又今正に行はる。本道独特の散点状村落並にその家屋の構造多少移住者の郷土を示すもののあるを見る。而もその近時の築成に斯るものクレオソート ^{注①} を塗れる粗板二色の亜鉛板を用ひて風致津々たるあり。

と、これは宮沢賢治が一九二四年五月に、農学校の教諭として生徒を引率して北海道旅行に行った後の「修学旅行復命書」で、帰路札幌から苦小牧くるこまきに向かう車窓の光景を記したものである。稲作の状況を捉え、建築の特色に関心を向ける。

そしてもう一つ、車窓からも多くの土地を観察した柳田國男の紀行文の中から、『村と学童』(朝日新聞社、一九四五年)所収の「三角は飛ぶ」を挙げておく。中央線で山梨から長野へ向かう車窓からの見聞である。

山梨県は小仏のトンネルからはじまり、向うは日野春と富士見の二つの停車場のなかほどでおわるのだが、見て行くうちに屋根の形がいつの間にかまるでかわってしまう。それというのが東のはんぶんは宣のたまで書いた家ばかりであり、西から西北へかけて長野県に近づくにつれて、板屋根がおいおいと多くなってくるからである。

農芸化学や土壌学を学んだ賢治、民俗学者の柳田、事例はこれだけに尽きるはずもない。ともあれ、仮に彼らと同じ列車、同じ線区に乗って外を眺めたとしても、同じ「光景」が見えるとは限らないことである。田中克己の詩「秋の湖」では乗り合わせた「北筑」^{注②}の農民出身の兵士が、沿線の農地を見ながら「僕」に「あの畑に白いは蕎麦の花でせうか／なんと唐辛子が沢山植わってますね／こらは私のくによりずつと豊かなことですね」と語っていた。農民出身の兵士の眼は率直かつ的確に自らの故郷と車窓の農村との比較に向かつていた。が、宮沢賢治のような概念化への志向は薄い。

(小関和弘「鉄道の文学誌」による)

注① クレオソート：ブナなどの木から得られる液体で、防腐剤、鎮痛薬に用いられる。

注② 北筑：茨城県の筑波山のふもとをここでは指している。

問九 傍線部甲・乙の片仮名を漢字に改め、記述解答用紙の所定の欄に楷書で記せ。

問十 傍線部1「そもそも故郷といふ意味がわからぬ」とあるが、それは具体的にはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

ア 人はそれぞれに違った故郷をもっているため、故郷という言葉によるイメージも人それぞれに異なり、理解するのが難しいということ。

イ 故郷という言葉がまだ一般化していない耳慣れない言葉であるため、その意味をはっきりとは理解できないということ。

ウ 自分は故郷という言葉の意味を知っているが、相手が自分と同じ意味でその言葉を用いているかどうかは分からないということ。

エ 故郷という言葉は理解できるものの、相手がなぜそのことを自分に話すのか、その意図が理解しがたいということ。

オ 故郷という言葉を観念として知ってはいるものの、自身の体験にうらづけられていないためにうまく理解できないということ。

問十一 傍線部2「一般性の側に押しやりながら突っ走る」とあるが、これは鉄道のどういう特徴を述べたものか。その説明として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

ア 鉄道が山や海に誰でも容易に行くことを可能にし、それらの場所との距離感が縮まり、それらを誰にでも親しめる場所へと変えること。

イ 鉄道が、乗客とその乗客にとつての具体的な場所とを切り離し、山や海を多くの人々に共有されるようなイメージにしようこと。

ウ 鉄道が誰にでも利用できるような交通手段になることによって、遠くの離れた場所に行くことを一般的な体験としてしようこと。

エ 鉄道が交通の便をよくすることによって、遠く離れた価値のない土地を、容易に行くことのできる価値ある場所へと変えること。

オ 鉄道が、離れた山や森に人々が簡単に行くことができるようにすることで、それらの場所の固有性を失わせてしまうということ。

問十二 空欄 A には、四字の語句が入る。最も適切な語句を考えて、記述解答用紙の所定の欄に記せ。

問十三 空欄 B には、短編小説「小僧の神様」や長編小説『暗夜行路』を書いた小説家の名前が入る。その名前を記述解答用紙の所定の欄に漢字で記せ。

問十四 傍線部3「何があるか、何が見えるかは視覚の問題であるが、同時に知覚、認識の問題である」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

ア 同一の光景を見ても、それを見ている人が対象のどの要素に注意を向け、何を意識しているかにより異なって見えてくるということ。
イ 私達の視覚においては、対象をより詳細に丹念に見ようとすることによって、より深い知覚や認識が得られるということ。
ウ 視覚を通して対象を見る場合、私達は自分の知覚や認識のあり方自体を理解することによって、より正確な視覚情報が得られるということ。
エ 視覚によって捉えられる事物や対象は、その事物や対象についての私達の知識や感情によって左右されはしないということ。
オ ある光景を私達が視覚で捉える場合、実際にはそこに存在しているもののごく一部分しか私達は認識してはいないということ。

問十五 傍線部4「概念化への志向」とあるが、これはどのような風景の捉え方を表したもののか。その説明として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

ア 目に見える風景の中のような事物を、それらについての知識・概念をもとにその素材や原料に分解して認識するような捉え方。
イ 目に入ってくる風景から自分が生まれ育ってきた故郷の概念を思い起こし、風景をそれと重ね合わせるような捉え方。
ウ 車窓の向こうの風景を、農村生活の理想的な概念をもとに比較したり評価したりすることのできるような捉え方。
エ 車窓から見える風景や事物の背景に、生活や習俗についての体系的な知識・概念を見いだすような捉え方。
オ 目の前に広がる風景を、多くの人々が抱いているような典型的な都市や村の概念として理解するような捉え方。

問十六 本文には、車窓からの光景を描いたいくつかの事例が出てくる。その事例についての説明として、適切でないものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

ア 室生犀星の場合、久々に戻ってきた自身の故郷を描き出していくが、それは懐かしく美化された風景というよりも粗末でよそよそしい風景として描かれている。
イ 阿川弘之の場合、敗戦時の日本に外地からもどってきた人物の目を通すことで、車窓が当時の日本の惨状を次々と描き出す装置のような役割を担っている。
ウ 大木実の場合、列車が駅にとまる短い時間が、「僕」がその町で過ごした長い年月を郷愁をもって振り返り、懐かしく浮かび上がる時間として描かれている。
エ 宮沢賢治の場合、農家の活動やその家屋の組成・形状などを専門的な言葉で描いており、そこには農学的な専門知識や関心が反映されている。
オ 柳田國男の場合、それぞれの場所で住む人々の生活・習慣の違いへの関心から、車窓からの風景はその違いを浮き彫りにするように描かれる。

甲、乙を読んで、それぞれ後の問いに答えよ。

甲

次の文章は『とはずがたり』の一節である。作者一条はかつて後深草院に仕える女房であったが、宮廷を退き、尼となって十七年ほどが過ぎた。これを読んで、後の問いに答えよ。

弥生^{注①}初めつ方、いつも年の初めには参りならひたるも忘れねば、八幡^{注②}に参りぬ。睦月^{注③}のころより奈良にはべり、鹿のほか便りなかりしかば、御幸とも誰かは知らむ。例の猪鼻より参れば、馬場殿開きたるにも、過ぎにしこと思ひ出でられて、宝前を見まゐらすれば、御幸の御しつらひあり。「いづれの御幸にか」と尋ね聞きまゐらすれば、「遊義^{注④}門院の御幸」といふ。いとあはれに、参り会ひまゐらせぬ御契りも、去年見し夢の御面影さへ思ひ出でまゐらせて、今宵は通夜して、明日もいまだ夜に、官めきたる女房のおとなしきが所作するあり。「誰ならむ」とあひしらふ。得選おとらぬといふ者なり。いとあはれにて、何となく御所さまのこと尋ね聞けば、「みな昔の人は亡くなり果てて、若き人々のみ」と言へば、¹いかにしてか誰とも知られたてまつらむとて、御宮巡りばかりをなりとも、よそながらも見まゐらせむとて、²したためにだにも宿へも行かぬに、「事なりぬ」と言へば、片方に忍びつつ、よに御輿^Bのさま氣高くて、宝前へ入らせおはします。

御幣の役を、西園寺の春宮権大夫勤めらるるにも、太政入道殿の左衛門督など申ししころの面影も通ひ給ふ心地して、それさへあはれなるに、今日は八日とて、狩尾^{注⑤}へ如法御参りといふ。網代興二^{注⑥}つばかりにて、ことさらやつれたる御さまなれども、もし忍びたる御参りにてあらば、誰とかは知られたてまつらむ、よそながらも、ちと御姿をいや見まゐらす、と思ひて参るに、また徒歩より参る若き人^{注⑦}二、三人行き連れたる。

御社に参りたれば、³さにやと覚えさせおはします御後ろを見まゐらすより、袖の涙は包まれず、立ち退くべき心地もせではべるに、御所作果てぬるにや、立たせおはしまして、「いづくより参りたる者ぞ」と仰せあれば、過ぎにし昔より語り申さまほしけれども、「奈良の方よりにてさぶらふ」と申す。「法華寺よりか」など仰せあれども、涙のみこぼるるも、^Iとやおぼしめされむと思ひて、言葉すくなにて立ち帰りはべらむとするも、なほ悲しくおぼえてさぶらふに、すでに還御なる。

御なごりもせん方なきに、⁵おりさせおはします所の高きとて、えおりさせおはしまさざりしついでにて、「肩を踏ませおはしまして、おりさせおはしませ」とて、御そば近く参りたるを、あやしげに御覧ぜられしかば、「いまだ御幼くはべりし昔は、馴れつかうまつりしに、御覧じ忘れにけるにや」と申し出でしかば、いとど涙も所せくはべりしかば、御所さまにもねんごろに御尋ねありて、「今は常に申せ」など仰せありしかば、見し夢も思ひ合せられ、過ぎにし御所に参り会ひまししもの御社ぞかし、と思ひ出づれば、隠れたる信の^{II}からぬを喜びても、ただ心を知るものは涙ばかりなり。

徒歩なる女房のなかに、ことに初めより物など申すあり。問へば、兵衛佐といふ人なり。次の日還御とて、その夜は御神楽、御手遊び、さまざまありしに、暮るるほどに、桜の枝を折りて兵衛佐のもとへ、この花散らさむ先に、都の御所へたづね申すべしと申して、つとめては還御より先に出ではべるべき心地せしを、かかる御幸に参り会ふも大菩薩の御心ざしなりと思ひしかば、喜びも申さむなど思ひて、三日留まりて、御社にさぶらひて後、京へ上りて、御文を参らすとて、「さても、花はいかがなりぬらむ」とて、

花はさてもあだにや風のさそひけむ契り⁸しほどの日数ならねば

御返し、

その花は風にもいかがさそはせむ契りしほどは隔てゆくとも (III)

注① 八幡：都の南にある石清水八幡宮。

注② 過ぎにしこと：作者は十三年前に石清水八幡宮で後深草院に偶然再会した。

注③ 遊義門院：後深草院皇女。

注④ したため：食事。

問十七 本文冒頭の波線部「弥生」「睦月」は陰暦の月の呼称である。睦月と弥生の間に位置する月の陰暦の呼称(漢字二字)を、記述解答用紙の所定の欄に記せ。

問十八 傍線部A～Eの「の」の意味・用法として最も適切なものを、次のA～オの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

ア A 同格	B 連体修飾格	C 連体修飾格	D 主格	E 連体修飾格
イ A 同格	B 連体修飾格	C 主格	D 連体修飾格	E 連体修飾格
ウ A 連体修飾格	B 連体修飾格	C 主格	D 同格	E 主格
エ A 同格	B 連体修飾格	C 連体修飾格	D 連体修飾格	E 主格
オ A 連体修飾格	B 同格	C 主格	D 連体修飾格	E 連体修飾格

問十九 傍線部1「いかにしてか誰とも知られたてまつらむ」の解釈として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- ア どうにかして遊義門院に私が誰であるかをわかりたいものだ。
イ どうにかして若い女房たちに私が誰であるかを知っていただきたいものだ。
ウ どうにかして遊義門院に私が誰であるかを女房から伝えてもらいたいものだ。
エ どうすれば若い女房たちを通して遊義門院にお会いできるだろうか、いや無理だ。
オ どうすれば遊義門院に私が誰であるかわかっていただけだろうか、いや無理だ。

問二十 傍線部2「事」が指すものを本文から抜き出し、記述解答用紙の所定の欄に記せ。

問二十一 傍線部3「さにや」の解釈として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- ア あれが御神体であろうか。
イ あれが遊義門院であろうか。
ウ あれが春宮権大夫であろうか。
エ あれが徒歩で来た若い人たちであろうか。
オ あれが祈りを捧げるための作法であろうか。

問二十二 次の空欄a～fに入る組み合わせとして最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

傍線部4「おはしまし」は、aからbへの敬意を表す。

傍線部6「つかうまつり」は、cからdへの敬意を表す。

傍線部7「申せ」は、eからfの敬意を表す。

ア	a 作者二条	b 遊義門院	c 作者二条	d 遊義門院	e 作者二条	f 遊義門院
イ	a 作者二条	b 春宮権大夫	c 作者二条	d 遊義門院	e 遊義門院	f 作者二条
ウ	a 作者二条	b 遊義門院	c 遊義門院	d 作者二条	e 遊義門院	f 作者二条
エ	a 作者二条	b 春宮権大夫	c 遊義門院	d 作者二条	e 作者二条	f 遊義門院
オ	a 作者二条	b 遊義門院	c 作者二条	d 遊義門院	e 遊義門院	f 遊義門院

問二十三 空欄 I II に入る最も適切な形容詞（もしくは形容詞の一部）を、それぞれ次のア～オの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- ア 悲し イ 空し ウ うれし エ あやし オ めづらし

問二十四 傍線部5「おりさせおはします所の高きとて、えおりさせおはしまさざりしついでにて」の解釈として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- ア 長い階段なので、遊義門院がまだその階段を全部お下りになっていないうちに。
イ 互いに名残がつかないので、高座から遊義門院が下りないでいらつしやる時に。
ウ お下りになる階段の段が高すぎて、遊義門院がお下りになれないでいる機会に。
エ 遊義門院がいらつしやる座が高座なので、女房たちがまだ近づけないでいる時に。
オ お参りになった宝前が高所なので、遊義門院が下りずにそこにいらつしやる機会に。

問二十五 傍線部8「契りし」の内容を示すものを、本文中から十五字以内で抜き出し（句読点も含む）、記述解答用紙の所定の欄に記せ。

問二十六 Ⅲの歌はどのような内容が歌われているのか。最も適切なものを次のア～オの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- ア まだ自邸の花は散っておらず今を盛りと咲いていると歌っている。
イ 互いに遠く離れていても遠慮せず戻ってくるようにと歌っている。
ウ いくら日にちが経ってもあなたの訪れを待っていると歌っている。
エ 世間の荒波に負けず、宮としての誇りを守って生きると歌っている。
オ 昔のままにあなたを信頼し、けつして裏切ることはないと歌っている。

乙

菅原道真の撰といわれる『新撰万葉集』には、次に示す〔和歌〕と〔漢詩〕とを一对にして収載する。その〔漢詩〕には、「袖の涙」(甲の二重傍線部)に相当する「袖涙」(乙〔漢詩〕の二重傍線部)の語が含まれている。よく読んで、後の問いに答えよ。なお、設問に関連する箇所は、返り点、送り仮名を省いてある。

〔和歌〕

^a 紅の色には出でじ注①隠れ沼の下に通ひて恋ひは死ぬとも

〔漢詩〕

閨房¹怨緒惣無^{オベテ}端^シ

万事吞心不表肝

胸火燃^ユ来誰敢滅^{リテ2}

^b 紅深袖涙不^レ応^レX

注① 隠れ沼の…枕詞。

問二十七 傍線部1「万事吞心不表肝」の「万事吞心」を書き下し文にし、すべて平板名で記述解答用紙の所定の欄に記せ。

問二十八 傍線部1「万事吞心不表肝」の意味を最も端的に表している〔和歌〕の句はどれか。次のア～オの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

ア 初句 イ 二句 ウ 三句 エ 四句 オ 五句

問二十九 傍線部2「誰敢滅」の意味として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

ア 熱い思いはいつたい誰が消せようか。
イ 袖の涙で誰が思いを断ちきれようか。
ウ 閨房の怨みは誰が晴らしてくれるか。
エ 肝心な約束はいつたい誰が破ろうか。
オ 灯された火は誰かを滅ぼすだろうか。

問三十 空欄 X に入れるのに最も適切な語はどれか。次のア～オの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

ア 却 イ 流 ウ 払 エ 干 オ 対

問三十一 〔和歌〕の傍線部a「紅」と〔漢詩〕の傍線部b「紅深」の説明として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

ア 「紅」は「くれなゐ」と読み、a「紅」は口元の赤い色合いをあらわす。b「紅深」は、衣服の深紅の色合いで、華やいだ気配をあらわす。
イ 「紅」は「べにいろ」と読み、a「紅」は口紅の赤さをあらわす。b「紅深」は、袖を染める口紅の赤い色合いで、深い情愛をあらわす。
ウ 「紅」は「くれなゐ」と読み、a「紅」は鮮明な赤い色をあらわす。b「紅深」は、袖が血の涙に染まることで、深い悲しみをあらわす。
エ 「紅」は「べにいろ」と読み、a「紅」は深い赤色のベニバナをあらわす。b「紅深」は、袖にしみた涙が赤いことで、深い苦しみをあらわす。
オ 「紅」は「くれなゐ」と読み、a「紅」はベニバナの赤色をあらわす。b「紅深」は、涙で化粧が袖ににじむことで、深い痛々しさをあらわす。

問三十二 次の文の空欄 Y ・ Z に入る語の組み合わせとして最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

甲の二重傍線部「袖の涙」は Y して流される涙であるのに対して、乙の二重傍線部「袖涙」は Z の思いに関わる涙である。

ア Y…旅寝 Z…離別
イ Y…喜悅 Z…怨恨
ウ Y…哀惜 Z…旅路
エ Y…思慕 Z…望郷
オ Y…追懷 Z…恋慕